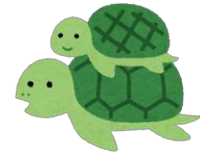


家庭・子ども支援室『あゆみ』について

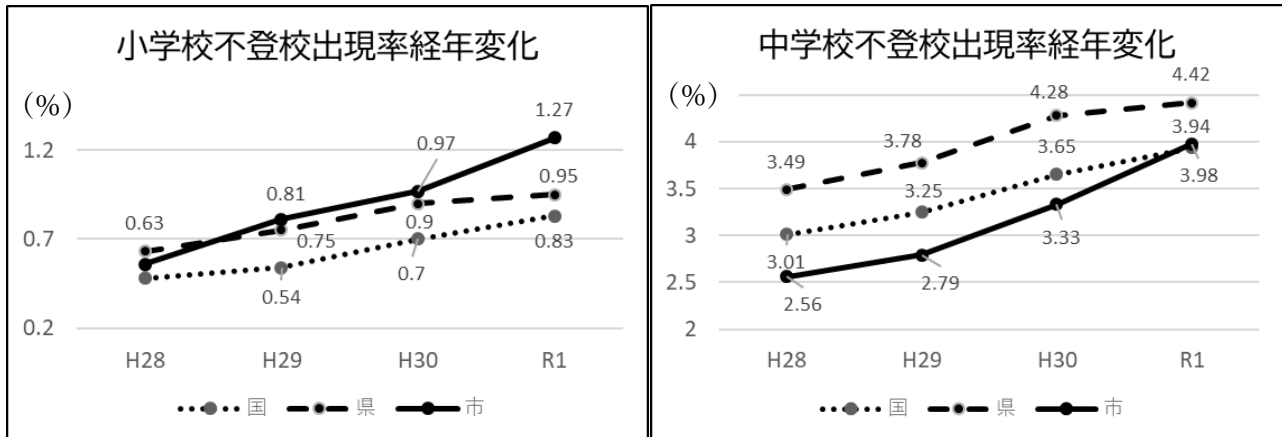
～ (あ) せらず (ゆ) っくり (み) らいへ ～



焼津市教育委員会 学校教育課

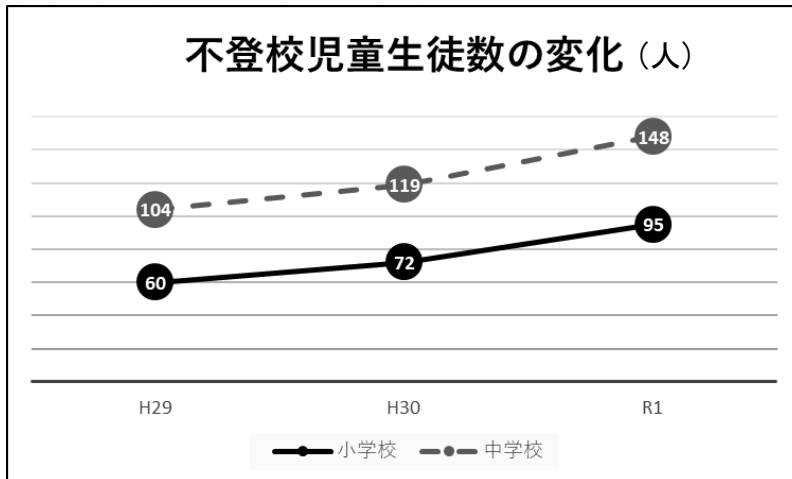
1 焼津市の不登校の状況

(1) 不登校出現率の経年変化 ※出現率…年度末の不登校児童生徒の全児童生徒数に対する割合



※小学校は、平成29年度から、国や県よりも高い出現率である。→H30までは、中学校は国や県より低い出現率であった。今後、小学校同様高くなることが予想される。

(2) 不登校児童生徒数の経年変化



学級における不登校児童生徒数

令和元年度

○小学校

不登校児童数 95人

学級数 266学級

※2.8クラスに1人

○中学校

不登校生徒数 148人

学級数 129学級

※1.1クラスに1人

2 不登校の克服に向けて

(1) 新たな不登校児童生徒を生まないために

○学校が中心となって魅力ある学校づくりに取り組む。教育センター「みらい」が魅力ある学校づくりに向け、学校を全面的に支援する。

→子どもにとって魅力ある授業の実現

- ・行事などでも子どもの主体的な取組を大切に、子どもたちを笑顔に
- ・教職員の資質・能力の向上
- ・子どもたちが安全に、安心して笑顔で過ごせる学校に

(2) 不登校の早期発見、早期対応

○学校は、子どもや家庭の変化を察知し、即時に対応する。家庭・子ども支援室は、学校からの依頼を受け、アドバイスを行う。

- ・教員が子どもに寄り添う時間の確保
- ・SC、SSWなどの専門職による研修の充実
 - ・家庭・子ども支援室による支援の充実

(3) 長期化している不登校児童生徒への対応

○家庭・子ども支援室が積極的に関わり、学校や他機関と連携してそれぞれの子どもや家庭の状況にあった対応を行う。

- ・学校が察知した問題を抱える家庭の情報を共有
- ・アセスメントによるそれぞれの子どもや家庭の状況にあった適切な支援
 - ・専門機関との連携(こども相談センター・児童相談所・適応指導教室・警察など)
 - ・SSWなど専門職の助言に基づいた対応

3 家庭・子ども支援室の具体的な対応(事例・課題と対策)

(1) 事例

以下の事例は、学校でも電話連絡や家庭訪問を繰り返し、改善に向けた働きかけを続けてきたが、なかなか改善に結びつかなかった。その学校から、家庭・子ども支援室「あゆみ」に依頼があり、改善に向かっているケースの一部である。

① 中3 男子 「学習支援によりつながり、今後、高校進学への準備を」

- ・欠席：中1 156日(7月以降全欠) 中2 190日 中3 86日(9月末)
 - ・7月から、週1回での訪問を開始
 - ・2回目の訪問時に、本人から学習支援の申出があり、3回目の訪問より開始
 - ・本人の学習意欲が高く、8月末から週2回に訪問を増やし、学習支援を継続
 - ・今後、2回のうちの1回を家庭以外の場所で学習できるか試し、緩やかに、適応指導教室へつないでいきたい
- 本人の学習意欲の高さを考えると、訪問回数を増やし学習支援を行うことで、高校進学に向け、外の世界とのつながりをつくることが望ましい

② 小6 女子 中2 女子 の姉妹 「訪問をきっかけに登校が増える」

- ・欠席：A子 小5 80日 小6 47日 B子 中1 61日 中2 23日
 - ・小学校からの依頼で、家庭訪問、姉妹の兄に会え、母への伝言を頼む
 - ・電話連絡、訪問をするが、姉妹の姉や祖母の対応で、母とは会えず
 - ・9月現在、姉妹の姉が学校へ朝2人を送ることで、B子はほぼ毎日登校、A子も以前よりは登校できている
- 現在のところ、登校できる日が増えているが、家庭の問題についてはそのままであり、母とつながることが必要であるため、今後も電話連絡や家庭訪問を行う

③ 小5 男子 「母との面談を継続 本人へアプローチ」

- ・小4 全欠席 小5 全欠席(9月末)

- ・ 4月より、学校で「あゆみ」が母と2週間に1度の面談を継続
- ・ 父との面談を呼び掛けているが実現していない（電話で話はできた）
- ・ 母へ、本人アプローチも含め家庭訪問をすることを提案
- ・ 本人とは会えていないが、「あゆみ」担当者宛に本人から手紙をもらった
- ・ 同じマンションの6年生に誘われ、本人は公園へ遊びに行くことができた
→本人は、「あゆみ」の職員とつながることに気持ちが揺れており、今後も継続的に母との面談を行いながら、本人とつながるチャンスをうかがう

④ 小2 女子 「本人の特性に合った就学支援を進める」

- ・ 欠席：小1 108日 小2 24日
- ・ はるかぜ、こども病院が関わってきたケース
- ・ 家庭訪問し、本人との関係づくり、本人支援を継続
- ・ 関係機関でケース会議を行い、本人の特性（自閉症スペクトラム）について共有
- ・ 来年度の、特別支援学級入級に向け、保護者の見学、本人の体験等を丁寧に進めている
→本人が安心して特別支援学級を体験し、来年度からの入級に見通しが持てるように丁寧に関わっていく必要がある。

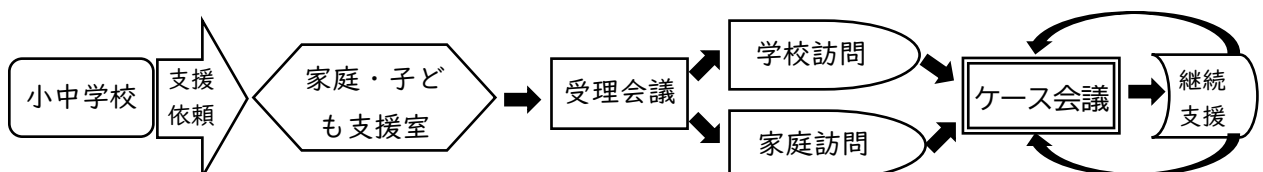
(2) 家庭・子ども支援室「あゆみ」の課題と対策

① 「あゆみ」の認知度

- ・ これまでの半年の取組を通し、学校や関係機関への「あゆみ」の存在や活動内容が認識されてきた。
- ・ 民生委員の方からも、「あゆみ」についての質問や、「近所に不登校の子供がいる」といった情報提供があるなど、認知度は上がりつつある。
- ・ 学校から対応希望のあったケースに対して十分な対応ができるようになったところで、次の段階として、家庭からも直接相談を受け付けることができるように、市民への周知を図っていく。

② 学校との連携

- ・ 事例からも分かるように、不登校が長期化し、学校からの働きかけで改善が図られていないケースでも、「あゆみ」がケースの情報を整理し、一次的な見立てを行い、「あゆみ」が中心となって対応したり、こども相談センター等の他機関と連携し、協働して対応したりすることで、改善の傾向が窺えるケースがある。
- ・ ケース対応を通して、アセスメントをし、それぞれのケースにあった短期目標や長期目標を共有し、役割分担をして対応していくためには、ケース会議が欠かせないことを確認した。今後「あゆみ」の役割の一つとして、学校を含めた他機関とのケース会議が計画的に行えるような手立てを講じていく。



③ ケース対応体制

- ・昨年度の不登校児童生徒数は計 243 人であるが、今回、学校から対応希望のあったケースは 107 ケースであった。9 月末までに対応した数は 37 ケースであり、すべての希望に答えられていない。
- ・不登校児童生徒数が年々増加していることを考えると、学校からの対応希望ケース数は更に増えると思われるため、対応体制などの改善を図っていく。

④ 対応方法

- ・現在対応中のケースにおいて、家庭訪問の回数を増やせば、より進展すると思われるケースがある。
- ・現在は SSW によるスーパーバイズを受ける回数に限られているが、この回数も増やすことができれば、更に適切な支援へとつなげられると思われるケースが少ない。そこで、SSW の関りの強化を図っていく。

⑤ 積極的な対象家庭の掘り起こし

- ・現在関わっているケースへの対応を引き続き丁寧に行うとともに、将来的には、学校からの相談を待つだけでなく、定期的に学校を訪問し、積極的に問題を抱えている家庭の情報を収集し、支援につなげていく。